



宝塚歌劇における「女同士の絆」——雑誌・作品・ 聞き取りを通じたファンと劇団における関係の研究 ——

張，嘉慧

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2023-03-25

(Date of Publication)

2027-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8530号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482278>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文要旨

氏名 張嘉慧
専攻 グローバル文化専攻
指導教員氏名 青山 薫

論文題目 (外国語の場合は日本語訳を併記すること)

宝塚歌劇における「女同士の絆」
——雑誌・作品・聞き取りを通じたファンと劇団における関係の研究——

論文要旨

本研究は、宝塚歌劇における「女同士の絆」に注目し、①女性ファンが維持する「女同士の絆」の発展と現在、および、②「清く、正しく、美しく」をモットーとした宝塚歌劇がどのように「女同士の絆」を表現するのかに焦点を当て、①と②の社会的な意味と、これらがどのように他の社会的イシューに関連するのかを明らかにするものである。

論文は、序章と終章を含めて全部で9つの章から構成されている。

序章では、まず、筆者が本研究に至った関心と背景を説明した。次に、宝塚歌劇における「女同士の絆」に焦点を当て、研究目的と問いを立てた。

第一章では、先行研究の評価を行い、「女同士の絆」に注目し、その様相や表現や意味を明らかにすべき理由を、フェミニズム理論とジェンダー研究における女性同士の関係性への関心に求めた。

第二章では、宝塚歌劇における「女同士の絆」が形成する時代的背景に注目した。教育のジェンダー化を通じて「少女」というアイデンティティが明治期から構築された経緯を紹介したのち、そこに表れる宝塚歌劇と深い関係性が見られる少女同士の関係性、特に「エス」と呼ばれる少女同士の親密な関係の特徴を概説した。そこで、少女文化にあらわれた「エス」は、ジェンダーの攪乱の物語ではなく、異性愛と同性愛への二重の抑圧の下に生まれる「少女に許された愛」の表象や男性に望まれる少女像と親密な関係を学ぶための手引きであることに注目した。

第三章では、「女同士の絆」が置かれた空間としての宝塚歌劇の地理的背景に注目した。宝塚歌劇の成立までの経緯を概観し、宝塚大劇場のある「阪神間」と「武庫川東岸」という空間の地域的背景について、都市社会論の観点から分析した。そこでは、宝塚大劇場が「日本ではない」「南欧的な空間」として設定されており、そのことによって、タカラヅカは、現実世界と虚構世界を連動させ、日本の観客に異国の憧憬の都への、虚構のノスタルジーを喚起する機能をもっていると議論した。

第四章では、宝塚歌劇の出版物を主な資料として、近代国家の要請に適合的な女性の性別役割と女性というジェンダーの異質性を美化・強調し、女性自身の欲求に応え、女性の自発性をかき出す形で、近代的な家父長制を支持させるという合意形成のメカニズムとして機能する宝塚歌劇の側面を明らかにした。そして、宝塚歌劇の機関誌『歌劇』を中心に、運営側と観客のそれぞれが執筆した文章を取り上げ、「男女合同」「大衆向け」を目指す宝塚歌劇の運営主体と、性別分離主義的な意識を持つ女性観客の拮抗の過程を検討する。そこでは、運営側が、女性観客の意見と好みを、宝塚歌劇の興行収入に決定的な影響を与える重要な行動指針として扱うようになる過程を明らかにした。

第五章は、宝塚歌劇のヒット作『ベルサイユのばら』を取り上げることによって、宝塚歌劇における「女同士の絆」の解釈と表現に関する分析を行なう。その際には、舞台表現の考察も踏まえ、

宝塚歌劇が「役名の存在」「芸名の存在」「愛称の存在」(東 2015)の各層で繰り広げられる物語を意図的に演出することで、観客の異なる解釈を誘引する「戦術」を使っていることについて考査する。そこでは、宝塚歌劇が「作り手」として、異性愛のロマンチック・ラブを優先し、女性同士のロマンチック・ラブの可視性を阻害する仕組みと、これに服従しない観客の解釈が見られる。

第六章では、1986年～2016年の『歌劇』の読者投稿欄「高声低声」を対象に、あらためて宝塚歌劇団をめぐる女性同士の関係に関連する投稿を整理、分類し、女性ファンのこれらの関係に対する関心やこれらの関係をめぐる活動についての言説を分析し、そこから、劇団側にとつての「前向きな」「女同士の絆」とは女性というジェンダーへのエロスの欲望や生殖器的性経験を伴わない、年功序列制、ヘテロノーマティヴィティ、ジェンダー役割、婚姻制度に逆らわないという特徴を持つ宝塚歌劇をめぐるあらゆる女性同士の関係であると定義した。また、これらの関係を通じて、生徒間の根本的な関係性が「年功序列」であることも明らかにした。

第七章では、本研究の問いにより包括的に答えるため、参与観察に基づき、劇団側の意図に影響されていないと思われる場所で、ファン個々に目を向けたインタビューを行った。そして、18名のそれぞれ異なる特徴を持つ協力者の語りを通して、宝塚歌劇の女性ファンがいかに、どのような「女同士の絆」を結び、繰り広げるのかを明らかにした。調査結果によれば、投稿欄の分析結果とは明らかに異なる点として、女性ファンによる宝塚歌劇の「女同士の絆」は、「同じ女性」であることを意識する相手との関係で、自分自身の欲求を優先する上、男性優位のジェンダー秩序、ヘテロノーマティヴィティ、異性愛規範を揺るがせる可能性を感じさせるものと言える。

終章では、本論全体を改めて振り返り、本研究の目的と問いに沿って結論をまとめた。宝塚歌劇における「女同士の絆」は、女性の連帯と協力、また女性の権利促進という共通の目標に向けて、現実主義で、かつ闘争的なフェミニズム思想を持ち始める可能性があるとも考えられるが、権力構造と規範の再生産を繰り返していることや、現実社会で「女同士の絆」を抑圧する具体的な問題に触れないことは否めない。最後に、聞き取り調査で新たな疑問として出てきた「女性向けの物語を女性が作り替える」二次創作のコミュニティにおけるダイナミクスを今後の課題として記述して、本論を結ぶ。

論文審査の結果の要旨

氏 名	張 嘉慧			
論文題目	宝塚歌劇における「女同士の絆」——雑誌・作品・聞き取りを通じたファンと劇団における関係の研究——			
判 定	合 格			
論文チェックシートによる確認	☒ 確認 ☐ 未確認 理由：			
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名	論文審査結果について
	委員長	教授	西澤 晃彦	☒ 確認
	委 員	教授	青山 薫	☒ 確認
	委 員	東京大学情報学環・学際情報学府・教授	田中 東子	☒ 確認
	委 員			☐ 確認
要 旨				
本研究は、世界でも稀にみる女性だけのミュージカルカンパニー宝塚歌劇と女性を主体とする宝塚ファンダムにおけるジェンダー／セクシュアリティの働き、宝塚大劇場を中心とする地理的概念としての「宝塚」、そして、これらを可能にする総合的な現象としての「タカラヅカ」についての文化研究である。本研究は、タカラヅカを読み解くため、「女同士の絆」を鍵概念とし、1) 女性ファンが維持する「女同士の絆」とはどのようなものか、2) 宝塚歌劇団がどのように存在し、どのような「女同士の絆」を表現してきたのか、さらに3点目として、1) と2) の社会的な意味と、これらがどのように他の社会的イシューに関連するのかを明らかにする。 そのために本研究は、第一に、経済的自立を得た女性ファンが次第に宝塚歌劇ファンの多数となる一方で、ジェンダー研究やクィア研究が画期的な進展を見た1980年代後半以降のファンの活動について考察する。資料としては、宝塚歌劇団の機関誌『歌劇』の読者投稿欄「高声低声」を利用し、読者でありファンである投稿者の投稿のテキスト分析を行う。第二に本研究は、宝塚歌劇の舞				

台作品そのものと『歌劇』はじめ宝塚歌劇団の公式メディアに掲載された情報の分析、および文献資料調査を通じて、宝塚歌劇が提示してきた「女同士の絆」の特徴を明らかにする。しかし、これは劇団運営側・制作者側の意図が色濃く反映されたものである点を考慮し、本研究は第三に、劇団の意図が影響していないと思われる場で現在活動するファンに対するインタビュー調査を行い、今日の女性ファンにとっての「女同士の絆」とは何かを明らかにする。以上三段階の解釈と分析を、同時代の出来事および社会動向に照らして行う過程で、本研究はさらに、宝塚歌劇における「女同士の絆」が持つ社会的な意味と他のイシューとの関連を洗い出し、検討する。

論文の構成は以下の通り。

序章では、筆者が本研究に至った関心と背景、上記冒頭の本研究の問いと目的が説明される。

第一章では、先行研究の評価から、「女同士の絆」に注目しその様相や表現や意味を明らかにすべき理由を、フェミニズム、ジェンダー、クィア理論における女性同士の関係性への関心に求め、とくに「男同士の絆」を理論化したイヴ・K・セジウィックが「女同士の絆」については明確に理論化していないことを踏まえ、この課題を継承する本研究の理論的射程を示す。

宝塚歌劇とその成立の社会史を振り返る第二章では、宝塚歌劇団の旧名「宝塚少女歌劇養成会」における「少女」という用語に注目し、明治期からの教育のジェンダー化を通して、「少女」がアイデンティティとして構築された経緯について考察する。

そして第三章で、阪神間の「少女」が宝塚歌劇の一大観客層となる背景を都市論に依拠して辿る。宝塚大劇場を中心とした地理的「宝塚」が、現実空間と虚構空間をつなぎ、観客に「生れ変わり」を体験させる現象としてのタカラヅカを可能にする空間であることを紐解いた第二節は、これまでにない宝塚論として注目に値する。

第四章は、タカラヅカが女性の空間になる過程とそこに潜むダイナミズムを明らかにする。そこでは、近代家庭の主婦に適した女性の育成をめざす歌劇団運営側の動向を踏まえ、宝塚歌劇が、女性ファン同士の仲間意識や男性排除的な行動を取り込みながら近代的家父長制を支持させる、合意形成のメカニズムとして機能していることが浮かび上がる。

第五章は、宝塚歌劇の代表作『ベルサイユのばら』の演劇的・音楽的評価を行い、「女同士の絆」の表現を促す男役の複雑性について考察する。ここでは、さまざまな解釈に可能性を開きながらも大勢ではヘテロセクシュアルなロマンチック・ラブを前景化する制作者側と、登場人物の関係性を読み替えて作り手の意図から外れる複数の解釈を楽しむ観客側の攻防が描かれる。スチュアート・ホルの記号論と東園子の「タカラジェンヌの四層構造」論に依拠し、膨大な「関係性のデータベース」を提供する宝塚歌劇の作品は両義性を持たざるを得ない、という指摘は説得的である。

第六章は、1988年から2016年発刊の『歌劇』の読者投稿欄「高声低声」に掲載された534件の投稿をテキスト分析し、これに基づいて「女同士の絆」を定義し分類する。そして、劇団側が言う「前向きな」「女同士の絆」が、女性ジェンダーへのエロスの欲望や生殖器的性経験を伴わず、年功序列と異性愛規範および婚姻制度に逆らわない女性同士の関係であることを明らかにする。

筆者自らが宝塚のファン活動に参加して参与観察を行い、属性が異なる18名のファンに対してインタビューを行い、その分析から今日の宝塚歌劇の女性ファンがどのような「女同士の絆」を切り結んでいるのかを明らかにした第七章は、本研究のもっとも独創的な部分である。聞き取りに表れた「女同士の絆」には、投稿欄の分析結果とは明らかに異なる、「ジェンダー規範から逸脱する

男役の身体表象」への憧れ、「レズビアン的な欲望」、ファンクラブ活動、二次創作などの理由や動機が見られる。

終章は、序章で示された問いに次のように答える。1) ファンにとっての「女同士の絆」は、宝塚をめぐって「同じ女性」であることを意識する相手との関係で、自分自身の欲求を優先し、現行ジェンダー秩序と性規範を揺るがせる政治性を感じさせるものである。2) 劇団運営側にとっての「女同士の絆」は、脱規範的作品解釈の可能性やファン活動を開くと同時に、支配イデオロギーに回収し続ける回路である。そして、3) ファンにとっての「女同士の絆」は、ファンダムから離れた社会では支配イデオロギーに抵抗できないように見えるが、ビジネスとしての宝塚歌劇が消費者の関心を無視し得ないように、現実の世界におけるジェンダー秩序や性規範の間隙を突く「大衆的なフェミニズム・プロジェクト」と言え、連帯と反抗の契機になり得る。

以上から、本審査委員会は、本研究が冒頭に挙げた目的を明らかに達成し、総合的現象としての「タカラヅカ」を社会的イシューにつなげて読み解く文化研究の重要な知見であり、価値ある集積であると認める。

よって、学位申請者の張嘉慧は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。